

『臨濟禪の立場から世界平和について』 ～子供に禅を～

東壽院住職 曦宗温

《はじめに》

私は静岡県の山あいにある寺の住職として普段は近隣の檀家さんとお付き合いしながら生活しております。今回『臨濟禪の立場から世界平和について』というシンポジウムテーマをいただいた時、正直言えば「世界平和」という単語が私の中ではあまりにも大きく漠然としており、どのように手をつけたら良いかわかりませんでした。

そこではじめに現代を共に生きる人々がどのようなことに悩み苦しんでいるのか把握しようと世界の現状のマクロ視点でのデータを読み取る試みをして、「世界の現状について」「世界平和の定義」「世界平和はどのようにして実現するのか」を提示しました。次に「宗教による平和とは」では各宗教の現状の考察、「子供に禅を伝える」では私が住職をしている寺での活動の紹介、「終わりに」として経済学者シューマッハーが提唱する仏教経済学と禅の結びつきについて述べさせていただきます。

一、世界の現状について

二〇一三年の第三回シンポジウムで発表された竹中智泰師は冒頭で「現代は混迷の時代である」として、産業や科学の発達が人々に利便、繁栄、長命をもたらした一方で、自然破壊や各地での紛争、経済不況、食糧危機など不安材料も尽きぬと言及されましたが、インターネットなどの情報インフラが世界中で発達したことによって各国の経済・文化状況がより正確にデータ化されるようになり、世界を俯瞰すれば、見えてくるのは経済や文化のグローバル化の進行と、国家及び個々の経済格差の拡大です。

経済格差については、二〇一四年の国際NGO オックスファムの報告書「少数の利益のために—政治権力と経済格差」によれば、世界人口の1%の富裕層が世界の富の半分を独占し、とりわけ最富裕層八十五人の資産総額は、所得でみて世界人口の下位半分の層（約三十五億人）がもつ資産に匹敵するようで、そのようなことが可能な理由として富裕層にとって都合の良い税制やタックスヘイブンによる租税回避などによって先進国、途上国問わず世界では過去に例がないほど格差が拡大している、と指摘しました。そして、多国籍企業や最富裕層が自らの利益に資するよう政治に働きかけ、経済ルールを

操ることで富を蓄積している、と説明しております。

その一方で、貧困国では劣悪な環境での生活を強いられる人が増加し、国内外の紛争も一層激しくなり、国から脱出する難民は増加し、二〇一五年に受け入れた難民はEU加盟国だけでも一〇〇万人以上になります。

そしてGDPがアメリカに次いで世界第二位となった中国や、経済成長著しい諸国においても国内間での経済格差は拡大しており、また大気及び水質汚染が深刻化し、急激な開発による自然環境破壊が人間社会に及ぼす影響も看過できない状況となっております。

日本は現在「成熟社会」と言われております。高度経済成長やバブル経済成長後の「失われた二十五年」と呼ばれる経済成長率の鈍化またはマイナス傾向が続いている状態で国としての成熟期を迎えています。

少子高齢化も進み、年金・医療・介護などの社会保障費は年間三十兆円以上（二〇一五年度）と税収五十七兆円（二〇一五年度）の半分以上を占めております。内閣府が発表した将来人口推計によれば、二〇五〇年の日本の総人口は九七〇八万人、そのうち高齢者人口は四〇%近くになるという推計が出ています。必然的に若者の就職先も老人や障害者の世話をする福祉関連が多くなり、就職についてもパートや派遣などの非正規雇用が四〇%を超えるなど、若者にとっては未来への希望が持ちにくく、三十代男性の三人に一人は未婚であるなど、未婚率の上昇の大きな要因となって少子化に拍車をかけております。

更には近い将来、ロボットが多く of 職業に従事するようになると予測され、今後は人間の存在の必要性そのものが問われる時代になると言われております。

一九七一年にノーベル物理学賞を受賞したガボール博士が翌年、著書『成熟社会』の中で「文明社会の行き着く先」として「人口および物質的消費の成長はあきらめても、生活の質を成長させることはあきらめない世界であり、物質文明の高い水準にある平和なかつ人類の性質と両立しうる世界こそ成熟社会である」消費行動こそが幸福であるとする成長社会からの脱却、成熟社会への転換が大切である主張しており、この思想に基づいて先進国各政府も「消費社会」から「消費を伴わない精神的充足のある社会」への転換を模索していますが、実効性のある政策を打ち立てられておらず、経済格差の拡大による貧困や家族の不在など、社会の閉塞感や孤立感から鬱病などの精神疾患を患う人は増加傾向にあります。

二、世界平和の定義

このように諸国それぞれ問題を抱える中、「平和」とは果たしてどのような状態なのでしょうか。

平和を科学的に研究する学問である「平和学」は、社会学者ヨハン・ガルトゥング博士の提起する「消極的平和 (negative peace) 」および「積極的平和 (positive peace) 」の二種類の概念が平和学における平和の一般的解釈になっています。

◎消極的平和…戦争や内戦、テロ、物理的な暴力、言葉による中傷などの「直接的暴力」だけが存在しない状態。

◎積極的平和…直接的暴力が無いことに加えて、貧困・飢餓・精神的抑圧・差別・教育や福祉の欠如など「構造的暴力」が存在せず、更に経済的・政治的安定、基本的人権の尊重、公正な法の執行、政治的自由と政治プロセスへの参加、快適で安全な環境、社会的な調和と秩序、民主的な人間関係、福祉の充実によって、個人における幸福が実現している状態。

平和学によれば、平和とは、戦争やテロが起こらないだけでなく、生命の安全、職業・教育・福祉の充実、性の平等など、個人それぞれが心安らかに日常生活を送れている状態であり、そして世界の全ての人ができる社会こそ世界平和と呼ぶに相応しいと定義されています。

三、世界平和はどのようにして実現するのか

では消極的平和及び積極的平和社会はどのようにすれば実現するのでしょうか。

まず第一に社会制度の改革が挙げられます。かつて国王などによる統治国家から罪の一極集中を解消する為に治める者と治められる者が一体である国民主権の民主主義へと変遷し、また資本主義から私有財産の所有を禁ずる社会主義、それを発展させた共産主義への革命などがおこなわれてきました。

しかし現在はグローバル化等の影響により、各国で各種格差の存在とその拡大、一握りの「持つ者」と多くの「持たざる者」の階層ができてしまっています。「富める者はますます富み、貧しい者はますます貧しくなる」、「マタイの法則」と呼ばれるこの現象が起こるのは、人々が自己利益を追求することによって貧富の二極分化が進むからです。

このように現在は各種政策を打ち出しても格差解消の抜本的解決は難しいのが現状です。

次に国家そのものを管理するという方法が挙げられます。国際連合（以下、国連）等がその責を担っており、たとえば国連憲章第一章第一条に国連設立の目的として掲げられた「国際平和及び安全の維持」を平和学の平和の定義に当てはめてみれば、第一項「平和に対する脅威の防止及び除去と侵略行為その他の平和の破壊の鎮圧とのため有効な集団的措置をとること並びに平和を破壊するに至る虞のある国際的の紛争又は事態の調整または解決を平和的手段によって且つ正義及び国際法の原則に従って実現すること」侵略行為や紛争のない状態こそ「平和」であると定義されており、これは消極的平和に該当します。

そして第二項「人民の同権及び自決の原則の尊重に基礎を置く諸国間の友好関係の発展並びに世界平和を強化するために他の適当な措置をとること」、第三項「経済的、社会的、文化的または人道的性質を有する国際問題を解決することについて、並びに人種、性、言語または宗教による差別なくすべての者のために人権及び基本的自由を尊重するように助長奨励することについて、国際協力を達成すること」は積極的平和に該当し、平等、格差解消を目的とすることを謳っています。

そして第四項には「これらの共通の目的の達成に当たって諸国の行動を調和するための中心となること」として、国連の役割が記されています。

しかし第二次世界大戦の戦勝国である常任理事国は拒否権等の強い権限を持つことで、時に常任理事国同士の利害がぶつかってしまい、真の平和活動への足かせとなっています。

四、宗教による平和とは

平和学では人権尊重や格差解消等によって平和がもたらされるとあります。では貧富や諸々の格差がある間は平和は訪れないのでしょうか。

先ほどの「マタイの法則」の言葉の元になっているのは新約聖書『マタイ伝』に出てくるイエスの言葉「持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる」であり、神への信仰によって心が豊かになり、信仰しないものは心が貧しくなると説いています。

あるいは同じ『マタイ伝』でイエスは「幸いなるかな心の貧しき人、天国はかれらのものである」、心が満たされていない人ほど神の王国への希望が受け入れやすく、逆に物質的に恵まれている人が神の道に入るのは「ラクダ

が針の穴を通るより難しい」と世俗とは逆説的に貧しさによって安らぎ、平和がもたらされ、「格差=不幸せ」ではないと主張します。

しかしながら、経済発展による物質的な充足を覚え、知識豊富で懐疑的な気質になった現代人にとって神の存在や貧しさを肯定することは難しくなっているのに加え、教会税などの負担を嫌って教会を離脱する人が増えており、例えばドイツでは二〇一四年の一年間で二十二万人がカトリック教会を正式に離脱し、日曜日のミサに参加する人は一〇%程度になるなど信仰そのものが揺らいでいます。

一方でムスリム（イスラーム教徒）の世界人口は増えており、『世界人口推計』によれば、二〇一三年時点でのムスリム人口の推計は十五億人と、二〇一一年の推計十二億人と比較すると二年間で三億人以上増加しており、更にピュー・リサーチ・センターの宗教人口推計によれば、二〇五〇年にはムスリム人口は二十七億人になると報告されています。

このようにムスリムが増える主な理由としては、大きく三つ、環境的要因、経済的要因、そして精神的要因が挙げられます。

環境的要因には、イスラーム国の所得水準の向上による幼児死亡率の低下、ムスリム女性と結婚する男性はムスリムでなければならない、中絶の禁止、近年経済発展しているインドネシア、インド、パキスタン、バングラデシュ等アジアにおけるイスラーム国の人口増加等が挙げられます。

経済的要因には、ムスリムに義務として課せられたザカート（義務的喜捨）、また余裕ある者はサダカ（自由喜捨）と呼ばれる喜捨によって貧困者を救う体制ができており、この社会福祉制度の恩恵を受けられること等が挙げられます。

精神的要因には、ムスリムが実行すべき五行（信仰告白・礼拝・喜捨・断食・巡礼）を実践し、神を信じて厳しく規律ある戒律を守ることによる充足感や、グローバル化によってムスリムが世界中に広がり、またインターネットによって手軽にイスラームの思想を知ることができるようになったことから無宗教者やキリスト教信者等がムスリムとの出会いや教えを知ることによる入信、転信等が挙げられ、これらの要因によってムスリム人口は増加し、神の下の平等、平和社会を実現しようとしています。

しかしイスラーム社会においては、クルアーン（コーラン、聖典）と預言者ムハンマドのハディース（言行録）によるシャリーア法に基づいて意思決定され、喜捨の精神も「財産を成すようになったのは、全て神アッラーの意志・働きかけに依るものである故、同様に帰依する者たちへ分け与える」という教えによるもので、喜捨はアッラーへの崇拜行為であり、直接人間を救うものではありません。そしてその根本には神への絶対的信仰があり、ザカ

ートやサダカを受けることができるのもムスリムに限られ、救われるのはアッラーを崇拝し、コーランの教えに従って生きる者のみということになり、異教徒あるいは無宗教の者には平和がもたらされることは無いとしており、これは同一グループ内での平等は確保していますが、他グループとの間での格差を発生させることとなります。

更には同一神を崇めるユダヤ教、キリスト教との違いによる摩擦や、IS（イスラム国、Islamic State）のように排他的思想による紛争、非ムスリムが多数を占める地域ではムスリムに対する経済的差別、宗教的差別への反発からテロ活動がおこなわれ、非ムスリムがイスラームに対して嫌悪感や恐怖感を抱く事態になっております。

仏教国である日本では江戸時代からの寺院に対する檀家制度が現在まで存続してはいましたが、ここ数十年は経済成長と共に「葬式仏教」と揶揄されるように寺の役目は葬儀と法事が主となり、仏教が社会に与える影響は著しく少なくなってしまうました。しかも少子化や人の流動等の「環境的要因」、葬儀代の高騰等の「経済的要因」、即物的な思考によって信心が持てない、オウム真理教のテロ等による宗教そのものへの恐怖感等の「精神的要因」によって檀家制度は崩壊しようとしており、都会では葬儀をしない人が増え、仏教離れに拍車がかかっております。

一方で神や特定の経典の信仰を強いられることなく安らぎの境地を得られる手段として、インターネットで禅やヴィパッサナー瞑想等が多く紹介されるようになり、従来無宗教者やキリスト教徒だった人が坐禅会等の行事に参加するようになりましたが、ごく一部の人に限られております。特に禅については iPhone を開発したスティーブジョブズが禅に傾倒していた等の話から興味を持つ人も多いですが、「難解」というイメージもあり、敷居の高さから敬遠される傾向にあります。

また茶道、華道、書道、能、俳句等の古来からの日本文化は禅と一如であり、稽古も禅修行の場という意味合いがありましたが、現代では一芸術と見なされたり金持ちの趣味という捉え方をする人も多いです。

五、子供に禅を伝える

では禅の道に入れるのは、生活に余裕のある富裕層、アカデミックな知識欲を持つ人、あるいは世を捨てたような人でないと無理なのでしょうか。

否、禅の世界へは老若男女を問わず誰でもどこからでも入れるはずですが、けれども実際はたとえ興味があっても仕事や家庭を持って目の前のことに追われている大人は禅に参ずる余裕もなく、また分別によって思考も硬直して

おり、矯正が難しいです。

ですので柔らかな思考を持っている子供の時に禅語や祖師の言葉を伝えておくことが大切です。子供時代に禅の世界に触れておけば、生きる指針となり、たとえその時は忘れてしまったとしても、記憶が消滅することはなく、心のどこかでブスブスとその思いは燃えているので、何かのきっかけで燃え上がるはずで。

しかし多くの方が「禅語や祖師の言葉は難解だし、子供は経験が浅いから伝わらないだろう」と諦めて、私は自身の子供時代に経験から、禅は誰にでも伝わると確信しております。

私が住職を務めている寺では五十年ほど前から夏休みに子供修養会を開催し続けており、毎年約百名ほどの子供達が泊まりがけで禅修行に励んでいます。

私自身も三十五年前にこの修養会に参加して、それが禅と触れあった初めての機会でした。

当時は先師が住職を務めており、なまけたり悪いことをすると竹の棒でバチバチと叩かれましたが、博識でユーモアがあり、大変熱心な和尚でした。

食事は修行道場と同じ正飯で食べる為、一時間近く正座し、食事が終わっても立ち上がることができません。掃除も隅々まできれいにし、特に東司と浴頭（風呂）の掃除は徹底的にやらされました。

坐禅は朝に一時間半、晩に二時間あり、抽解の際には先師が法話を語りました。坐禅が苦手だった私は、坐禅の時間が短くなるからずっと法話をしたいなと思うような子でしたが、実際、先師の話はとても面白く、私は子供ながらに色々気づくことができました。

私が十四歳の時、先師は、本堂の東司（便所）が汚れていると私たちを注意した後、こんな話をしてくれました。

「昔の中国では大便をした後、紙では無く、乾屎橛（かんしけつ）という棒でお尻を拭いていたそう。今から千年以上前の坊さんが弟子達にこう言った、『おまえ達の体からは本物の人がいとも出入りしているから、その人をしっかり見なさい』」、先師はそこまで言うと私達をグルッと見渡して、「おまえ達には見えるか？」と尋ねました。私達は誰一人答えられませんでした。すると先師は話を続け、「すると一人の弟子が臨済和尚に『本物の人というのは一体どんな人なんですか？』と尋ねた。そこで臨済和尚はグッとそいつの胸をつかんで『さあ、おまえが言ってみろ！』と言った。けれどもそいつは何も言えなかった。おまえ達と同じだな。そこで臨済和尚は『おまえ達から出入りしている人は乾屎橛と同じだ！』と言ったのだ」

そして先師は「なんのことだかわかるか？」と再び私達に尋ねました。私

達はしばらく黙っていましたが、一人の男の子が「幽霊ですか」と答えました。すると住職は「おまえは幽霊がおまえから出入りしているの見えるのか。そうではない」と言いました。そこで私は呼吸のことだと思い、思い切って「空気ですか」と答えると、先師から「馬鹿もの！おまえは空気なのか」と大きな声で叱られてしまいました。

そして先師は「いいか、乾屎橛はお尻を拭く。トイレットペーパーも文句も言わずただ尻を拭いてきれいにする。おまえ達から出入りしている本物の人も、便所のサンダルが曲がっていたら『叱られると嫌だから』とか『褒めてもらえるから』などと思わず、ただ揃える。ご飯を食べ終わったら『ごちそうさまでした』とただ食器を片づける。朝になったらただ起きて、夜になったらただ寝る。それが本物の人だ。おまえ達がサンダルがグチャグチャになっていても直そうとしないのは、ただやる本物の人に気づかないからだ」と説き、最後に「何を言っているかわからなくても覚えておきなさい」と言いました。

乾屎橛は大便を拭く棒ではなく大便そのものという説もありますし、先師の解釈が正しいのかどうかは各人のご判断にお任せしますが、私は「ただやる本物の人」という言葉がとても印象に残りました。

また私が高校生の時、先師は「おまえ達は人を見れば好きとか嫌いとか言う。好きだと言われたい、嫌いだと言われたくないと思う。調子に乗ったり腹を立てたり、朝から晩まで毎日親や友だちや周りの人の目ばかり気にしてイライラしたりオドオドしている。どうして調子に乗ったり、腹を立てたり、オドオドしてしまうかわかるか。それはおまえ達が自分自身を信じていないからだ。まわりに求めるな。まわりにごまかされるな。すべてそのまま見て、得だからやるとか損だからやらないとかそんなくだらないこと思わないで、自分を信じて、自分のやるべきことをやりなさい」と説きました。

当時私は自分に自信がなく、他人の目を気にして自分の存在の卑下していました。けれども「自分を信じて、自分のやるべきことをやりなさい」という言葉に感動と安堵を覚えました。この言葉に清々しさを感じ、以後は「自分のやるべきことをやろう」と積極的に物事をおこなうようになり、他の言動があまり気にならなくなりました。

そして私は夏の修養会だけでなく、冬休みや春休みにも寺に行くようになりました。たいてい何人か仲間がいましたが、私を含めて親との関係がうまくいっていない人でした。

ある時、坐禅の後に先師は私達に親のことをどう思うか聞いてきました。私達は口々に親の文句を言いました。一通り聞き終えた後、先師は「おまえ

達は親をととても嫌っているが、殺してみたらどうだ」と言いました。私達は和尚さんがそんなことを言うので大変驚き、皆黙ってしまいました。すると先師は「殺せないのか。だが『仏を殺し、坊主を殺し、父母を殺し、親戚を殺し、そして初めて本当に自由自在に生きることができる』という言葉があるぞ」と言い、私はそこでまた驚きました。しかし先師が「おまえ達はすぐに何かのせいにしたがるが、そんな気持ちでいる間はまったくどうしようもない。年寄りの愚痴みたいなことを言ってるな。誰がどうしたとかこうしたとかそんな気持ちは全部捨ててしまえ。自分自身をしっかりと見ろ。そうすれば親がどんなにありがたいものか自分から気がつく」と言いました。確かに私は自分の事は棚に上げて他人の文句ばかり言っていました。自分自身はしっかりと生きているのかと多少なりとも考えるようになり、いつしか親への不満も消えていました。

先師の言葉が『臨濟録』の「上堂」や「示衆」に書かれているものであると今は知っていますが、三十年前、私は臨濟禪師の存在も、その現行録である『臨濟録』のことも無論知りませんでした。しかし「自分を信じろ」「自分自身をしっかりと見ろ」という言葉を聞いた時、私は直感的に「これは大切だ」と確信を覚えました。そして、あの多感な時期にそれに気がつけて良かったと思います。

おさなごの 次第次第に 知恵づきて 仏に遠く なるぞかなしき

私達は大人になるに従って知恵分別がつくようになります。それは「成長」であります。そのことによって自他を隔て、好悪損得を覚えることで自ら苦しみ、他を苦しめてしまいます。ですので子供が子供である間に自身の仏心の存在を伝え、自身の働きの素晴らしさに気づかせることが大切であり、その手立てとして禅があります。

禅に参究した能者である世阿弥は、自著『風姿花伝』の中で、「能に、花を知るとい言葉がありますが、いろいろ考えてみるとこれは、何よりも大切なことであるように思われます。非常に肝心要のことでありながら、同時に、よくわからないことでもあります。これはどうすればわかるようになるでしょうか」という問いに対して、世阿弥は「これは、この道の極める際の奥儀ともいべきことで、最も大事なこと、秘事といべきようなことは、ただただ、この一時にあると言っても良い。(中略)花のある時は、そう長くはないので、そのようすが広く世間に知れ渡って名声を得るといような

ことも少ない。ただ、誠の花として、どうして咲くか、どうして散るかという道理まで極めた者であれば、思いのままに花を咲かせ、散らすこともできる。したがって、花を長いあいだ保つこともできる。それでは、この道理をどうすれば知ることができるかということだが、(中略)あまり煩わしく考えすぎるのも良くなく、基本的には、七歳から始めて、年々さまざまな稽古を重ねて、物まねの数々なども、よくよく心底理解して、それぞれの態(わざ)をならい覚え、能を尽くし、工夫を極めたのちに、はじめて、ここでいう失せぬ花ということを考え知ると良い。まずは物まねのいろいろを極めるという気持ちが大切であって、それがすなわち花の種となると言うて良い。だから花を知りたいければ、まず種を知らなければならぬ。花は心。種は態。また古人の詩にこのようなものがある」(谷口江里也訳)と答えて、六祖慧能禅師の偈を引用しています。

心地含種性 普雨悉皆萌 (法雨即花生)
頓悟花情已 菩提果自成

心に種を含み、真理の雨によって皆開き、そしてすみやかに花の心を悟る、菩提の果実が自ずと実るように。

世阿弥にとって花とは芸能の奥義であり、奥義とは仏心であり、そして奥義は言葉によって学んで得るものではなく、若き頃より成りきることで自然に表れてくるものだと言っています。

三十年前、修養会で先師が語った臨濟禅師の言葉は、もし学校の教室で先生から聞いたとしても「良い言葉だな」と思って終わりだったかもしれませぬ。けれども修養会で箸の上げ下げに気を使う食事や、がむしゃらにする雑巾がけ、ジッと坐り続ける坐禅によってただ為すべきを為すことに没入して空になった心だったからこそ真理の言葉がスッと入り、気づくものがあつたのだらうと思ひ、あらためて「行」の大切さを感じています。

現在私が住職をしている寺では修養会の他に、教育委員会主催の寺子屋を隣寺と共同でおこなっており、小学校が休みの土曜日になると子供達がやってきて懸命に勉強、掃除、坐禅等をしています。ただおこなう、そして何かを感じ取ってもらえればと思います。

六、終わりに

イギリスの経済学者シューマッハーは一九七三年に著した『スモールイズビューティフル』（Small Is Beautiful: Economics As If People Mattered）はエネルギー危機や原発の危険性を預言し、大量消費を幸福度の指標とする現代経済学や科学万能主義に疑問を投げかけた名著ですが、シューマッハーはビルマ（現ミャンマー）滞在中に見た仏教徒の生き方に感銘を受けて仏教経済学を提唱しています。

シューマッハーは仏教と経済の関係について問われると、「精神性を欠いた経済学は一時的な物的満足を与えるだけで、内的な達成感とは与えません。精神的な経済学は、サービスと同情と人との絆というものを利潤や効率と並んではたらかせません。両方とも必要で、切り離せません」と答え、「いのちの尊重」「非暴力」「知足」「共生」「簡素」「利他」「多様性」「持続性」等が大切さを説きました。

これらの単語は仏教思想を表すものであり、この世界が実現すれば理想的な平和世界となるでしょう。しかし、もし仏教経済学を制度化して人々に強制したり、仏教経済学を信奉する人だけのコミュニンを作っても、過去の歴史に鑑みればおそらく破綻してしまうはずで

古人云く、外に向って工夫を作すは総べて是れ痴頑の漢なりと。汝且く随处に主と作れば、立処皆な真なり。

理想世界を作ろうなどと外に向かって働きかけるな。いつも本物となつてただおこなえば、そこがそのまま知足共生利他の世界だ。

ただ生きる、平和はそこにある。（完）